



— 京都大学 —
農学部
FACULTY OF AGRICULTURE

『生命・食料・環境』の
持続的未來のために

KYOTO UNIVERSITY

受験生のみなさんへ

農学部への招待



農学部長

澤山 茂樹

皆さんは、地球上にどのくらいの農耕地があるか、知っていますか。全陸地面積の12%弱にあたる、約17億haになります。このうち、私たちの主食となる3大穀類、イネ・コムギ・トウモロコシの栽培面積は、6億ha強です。この6億ha強の農地で、今、どのくらいのイネ・コムギ・トウモロコシが生産されているのでしょうか。実は、ここ5年間、その生産量は、3大穀類を合わせて、ほぼ毎年24～25億トンです。2014～15年は、エルニーニョ現象のため干ばつが頻発し、世界各地で不作が伝えられていたのですが、地球全体では、あまり大きな影響を受けず、ほぼ安定して、これくらいの生産量を挙げています。ただ、こう言われても、24～25億トンがどのくらいの量か、想像しにくいと思いますが、大雑把に言って、穀物1トンで1年間5人が食べて生きていけます。そうすると、24～25億トンが生産されるということは、計算上は、120～125億人の人口を養うことができるということになります。何だ、食料問題って、そんなに深刻ではないじゃないか、と思うかもしれませんが、家畜飼料との競合もあります。残念ながら、生産物がうまく配分されるシステムもできあがっていませんから、地球全体では食料は足りていても、国や地域によって、飢饉が頻発するという状況にあります。また、現在の比較的安定で高い収量性を可能にしているのは、実は、大量のエネルギーです。現代の進んだ農業技術には欠かせない、化学肥料や農薬、農業機械など生産・操作には、大量のエネルギーが必要です。ご存じのように、化石資源の大量使用を原因とする地球温暖化が、解決すべき大きな課題となっています。政府は、2050年までに温室効果ガスの排出を、農林水産・畜産業を含め日本全体として実質ゼロにすることを宣言しました。また、気候変動の影響によって、今後、農業生産の不安定性は高まってきます。地球の将来の安定した食料生産を考える際、私たちがすべきことは、まだまだ、たくさんあります。

解決を迫られている地球規模の問題は、他にも数多くあります。今、地球上の全森林面積は、約40億haですが、この数10年間、減少し続けています。カーボンマイナス・ゼロどころか、カーボンプラス要因となっています。主として、材木利用や農地、産業用地、宅地への開発のためです。このことは、実際に森林が減っている地域の環境のみならず、温暖化など地球環境に深刻な影響を及ぼしています。また、グローバル化や経済発展による地域間格差の拡大は、食料生産を支える地域社会を疲弊させ、社会全体を不安定化させるばかりか、食料生産にとっても環境保全にとっても悪影響を与えています。この問題も解決が急がれています。

私たちの社会は、このような多くの地球規模の課題をかかえており、私たち自身や私たちの次の世代のために、こういった課題を早期に解決することが必要です。京都大学農学部は、「生命・食料・環境」をキーワードに、このような多様な課題を解決するための教育・研究を進めています。皆さん、一緒に困難な課題に取り組んでいきましょう。

京都大学農学部 沿革

明治30年	1897	京都帝国大学設置
大正12年	1923	農学部設置
大正13年	1924	農作園芸学、林学、農林化学、農林生物学、 農林工学、農林経済学の6学科設置
大正14年	1925	農作園芸学科を農学科に改称
昭和22年	1947	京都帝国大学を京都大学と改称 水産学科設置
昭和24年	1949	新制京都大学設置
昭和28年	1953	農林化学科、農林工学科をそれぞれ農芸化学科、 農業工学科に改称

昭和40年	1965	林産工学科設置
昭和42年	1967	食品工学科設置
昭和47年	1972	畜産学科設置
平成 7年	1995	農学部10学科を生物生産科学科、 生物機能科学科及び生産環境科学科の3学科に改組
平成13年	2001	農学部3学科を資源生物科学科、応用生命科学科、 地域環境工学科、食料・環境経済学科、 森林科学科及び食品生物科学科の6学科に改組

生命・食料・環境

農学は、生物学のみならず、化学、物理学、社会科学等の多様な基礎知識を必要とするいろいろな学問分野から成り立っています。21世紀の重要課題である「生命・食料・環境」に関わる様々なかつ複合的な問題に立ち向かっていくためには、特定の専門に偏らない広い視野に立った総合的な取り組みが必要です。本学部は、それぞれの分野に共通する基礎的科目を系統的に教育するとともに、学科ごとに異なる高度な専門教育を実施することにより、国際的な広い視野と高度な専門知識をもち、高い倫理性と強い責任感を持ち、主体的に行動でき、コミュニケーション能力に長けた多様で優れた人材を養成することを目的としています。したがって、各学科が対象とする様々な課題に果敢に挑戦する意欲をもち、応用力と適応力、ならびに、それぞれの専門教育に必要な学力を有する学生を求めています。その学力を測るため、一般選抜では全学科共通で大学入学共通テストの得点に加え、国語・数学・理科(物理、化学、生物、地学から2科目)・外国語(英、独、仏、中から1科目)の個別学力検査を実施して入学者選抜を行っています。また、各学科の示す人材を求めるために特色入試も行い、調査書、学業活動報告書、学びの設計書、大学入学共通テストの成績のほか、英語能力検定試験、小論文、口頭試問、面接試験を学科ごとに組み合わせて合否判定を行っています。

教育研究・人材養成の目的

I. 教育研究の目的

本学部は、自由の学風を重んじる本学の基本理念を踏まえながら、世代を超えた生命の持続、安全で高品質な食料の確保、環境劣化の抑制と劣化した環境の修復など、人類が直面している困難な課題の解決に取り組み、本学が目指す地球社会の調和ある共存に貢献することを教育研究の目的とする。

II. 人材養成の目的

上記目的の下、本学部は次のような人材を養成する。

農学及びそれに関連する学識と高い倫理性を身につけ、かつ、以下のような能力を備えた社会人

- (1) 人類が直面する課題に対して、幅広い視野から科学的解決法を構想できる。
- (2) 農林水産業及び食品・生命科学関連産業の意義と重要性を理解し、その発展に寄与できる。
- (3) 生命・食料・環境に関わる世界水準の自然科学・社会科学研究が理解できる。

目次

03 農学部の構成

05 農学部の教育

■ 学科の紹介

07 資源生物科学科

11 応用生命科学科

13 地域環境工学科

15 食料・環境経済学科

17 森林科学科

21 食品生物科学科

23 学習環境

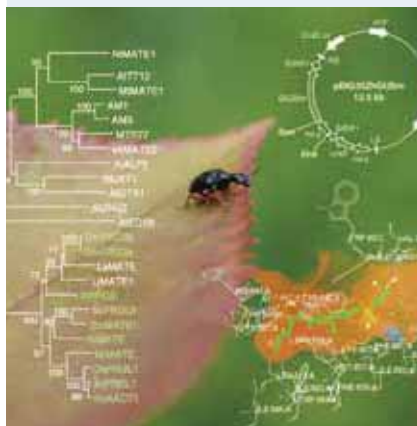
25 附属施設

26 関連部局

27 国際交流

29 キャンパスマップ

農学部の構成



資源生物科学科

- 環境調和型の作物生産技術
- 動植物の遺伝と育種
- 食品素材の評価と開発
- 遺伝子組換え作物・動物
- 胚性幹細胞と生殖幹細胞
- 微量栄養素の代謝と機能
- 地球温暖化と動植物の環境生理
- 陸域環境汚染と環境保全
- 水産資源
- 海洋微生物
- 海洋環境保全
- 魚類学
- 脂質代謝の分子制御
- 昆虫学
- 植物寄生・共生菌の生理と生態
- アニマルウェルフェアと環境評価



応用生命科学科

- 分子生物学
- 細胞生物学
- ゲノム科学
- バイオテクノロジー
- バイオレメディエーション
- 疾病関連遺伝子
- 天然物有機化学
- 生物活性化化合物の分子設計
- 植物栄養学
- 微生物による有用物質生産
- バイオ計測
- バイオセンサとバイオ電池
- 生体エネルギー
- タンパク質の構造とはたらき
- 植物の環境応答
- マルチオミクス解析
- シングルセル解析



地域環境工学科

- 農業水利施設の資産管理
- 地域防災
- 水資源・水環境の最適マネジメント
- 農地・農業水利システムのもつ多面的機能
- 水・土・大気の問題
- 気候変動への対応策
- 地域づくりの方法論
- 農山村地域の活性化
- 植物環境調節
- テラメカニクス
- 農業生産と作業計画の最適化
- スマート農業
- ロボット・ファーム
- 農畜水産物・食品の物性と品質評価
- 光や音を用いたバイオセンサ
- 生物診断と細胞内物質の光コントロール





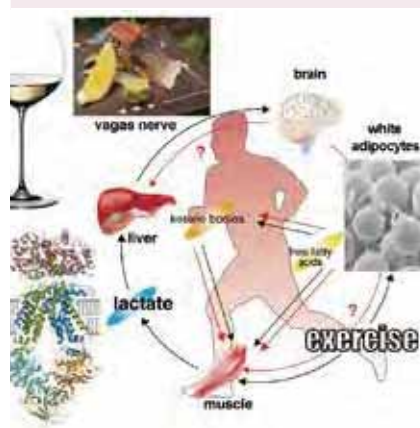
食料・環境経済学科

- 農業・食料関連組織の経営学
- 生産から消費までのフードシステム
- 技術・経営・会計情報
- 農村社会・地域農業
- 地域資源の開発と環境保全
- 農産物貿易と地球環境
- 食料・農業・環境政策
- 環境と資源利用の経済評価
- 木材の生産・供給・流通・消費
- 森林の環境機能
- 途上国農村の貧困削減
- フィールド実験
- 比較制度分析
- 農業・農村の比較史
- 農林資源開発の歴史学
- 食と農の人類学・社会学
- 食農倫理・思想



森林科学科

- 森林の持続的利用と社会の持続的発展
- 樹木種多様性の機能と保全
- 樹木と森林の成長とその生理生態学
- 森林の生物多様性や森林生物の保全と管理
- 庭園・緑地・自然の保全・再生・創出
- 土砂災害の防止・軽減
- 木質材料の物性や人との親和性の評価
- 木材・木造の長期・有効利用の技術
- セルロースの材料科学
- 木質の超微細構造と細胞壁形成機構の解明
- 木質素材ベースの
ナノ複合材料・生分解性材料
- 木材化学成分の構造、役割と利用
- 森林生態系の構造・機能および維持機構
- 洪水や気候の緩和など環境保全機能
- 生化学・分子生物学による
バイオマス循環の科学
- バイオエネルギー・バイオケミカルス
- 生態系の機能と社会との関わりの解明



食品生物科学科

- 動物・植物・微生物・酵素
- 神経系・循環器系・消化器系・
内分泌代謝系・免疫系
- タンパク質・脂質・糖質・核酸・微量栄養素
- 生理活性物質の探索・構造決定・合成
- X線結晶構造解析と生体イメージング
- 次世代シーケンサーとマルチオミクス
- 食品成分・生理活性物質の細胞・
生体への作用
- 遺伝子発現制御とシグナル伝達
- 体内で食情報が伝わる仕組み
(五感・脳腸関連)
- 食行動をコントロールする仕組み
- 運動と疲労／行動する動機
- 肥満とメタボリックシンドローム
- 食品による生活習慣病・認知症の予防
- 常在微生物叢(腸内細菌)と発酵食品
- 食品ソフトマターのナノテクノロジー
- 食品設計とバイオエンジニアリング
- 新たな保健機能食品の開発



農学部教育

基礎学問から未知の分野の研究へ

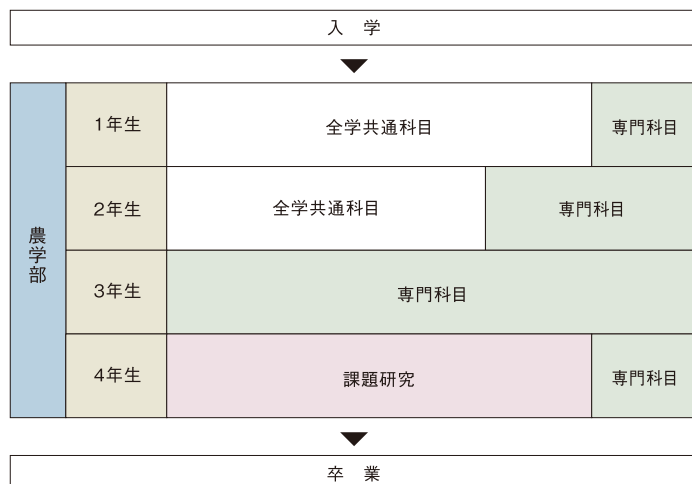
京都大学農学部では、入学時に学科が決定し、それぞれの学科で4年間の一貫教育が行われます。カリキュラムは大別して全学共通科目と専門科目から構成されています。

全学共通科目とは、京都大学全学部の学生を対象に開講される一般教養科目です。人文・社会科学科目群、自然科学科目群、外国語科目群、情報学科目群、健康・スポーツ科目群、キャリア形成科目群、統合科学科目群、少人数教育科目群に区分される多種多様な科目で構成されており、講義以外にも演習、ILASセミナー、実験、実習など様々な形態で開講されています。どの科目を選択するかは、基本的には学生に委ねられています。全学共通科目を積極的に習得することにより、京都大学が持つ大きな「知」に触れることができ、あなたの知的探求心は大いに刺激されるでしょう。

専門科目とは、それぞれの学科で開講される専門教育の科目です。一部の専門科目については1,2年次からも学びますが、主として3年次に所属学科の学問分野について、基礎から高度な内容に至るまで幅広く学習します。3年次には専門的な実験・実習も始まります。4年次になると、各学科の研究分野（研究室）に所属して課題研究（卒業研究）に取り組むことになります。課題研究では、最先端研究を行っている指導教員と相談して探求すべき課題を設定します。新しい方法論を駆使して課題に取り組む過程は平坦とは限らないので、あなたは大きな困難に直面することになるかもしれません。しかし、困難を乗り越える過程でああなたの創造性は磨かれ、目的をとげたときには未知の課題に挑戦する楽しさ、すなわち学問のおもしろさを実感することができます。



入学から卒業までの進路



京都大学の一年間

令和3年度

前期	4月 8日	前期授業 開始
	6月 18日	創立記念日
	7月 21日	前期授業 終了
	7月 22日	前期試験・フィードバック期間 開始
	8月 4日	前期試験・フィードバック期間 終了
	8月 5日	夏季休業 開始
後期	9月 30日	夏季休業 終了
	10月 1日	後期授業 開始
	11月下旬	11月祭(京大大学学園祭)
	12月29日	冬季休業 開始
	1月 3日	冬季休業 終了
	1月 24日	後期授業 終了
	1月 25日	後期試験・フィードバック期間 開始
	2月 7日	後期試験・フィードバック期間 終了

京都大学農学部で取得できる主な資格について

在学中に所定の科目を修得することによって以下の資格を取得することができます。

※高等学校教諭一種免許(理科)及び中学校教諭一種免許(理科)について、森林科学科以外の学科に入学した学生も、森林科学科における所要資格を満たせば取得可能です。

※高等学校教諭一種免許(農業)について、食料・環境経済学科以外の学科に入学した学生も、食料・環境経済学科における所要資格を満たせば取得可能です。

応用生命科学科

食品衛生管理者・食品衛生監視員

森林科学科

樹木医補、自然再生士補、
高等学校教諭一種免許(理科)
中学校教諭一種免許(理科)

地域環境工学科

測量士補

食品生物科学科

食品衛生管理者・食品衛生監視員

食料・環境経済学科

高等学校教諭一種免許(農業)

FAQ よくある質問

Q 卒業後の進路はどうなっていますか？

A 資源生物科学科、応用生命科学科、地域環境工学科、森林科学科、食品生物科学科ではおおよそ7～9割の学生が、食料・環境経済学科ではおおよそ5割の学生が大学院に進学しています。大学院進学後を含めた主な就職先は各学科ページに掲載していますので、そちらをご覧ください。

Q 大学院では何をするのですか？

A 農学部4年間で学んだ知識と技術をさらに深めるため、大学院農学研究科修士課程(2年間)と、その後の大学院農学研究科博士後期課程(3年間)が設置されています。修士課程では、農学部学生同様、講義や演習を学修するとともに、研究分野(研究室)に所属して独自の修士論文を作成するための研究を行い、修了すると修士(農学)の学位が授与されます。

修士の学位を取得した後、さらに研究を続ける場合は博士後期課程に進学します。博士後期課程では、ほとんどの時間を博士論文を作成するための研究に費やします。作成した博士論文が審査の結果、合格と判定されると博士(農学)の学位が授与されます。

資源生物科学科

多様な資源生物の機能を探求し、
その次世代利用基盤および生態系と調和した
生産技術を発展させる

アドミッションポリシー

農業、畜産業および水産業が抱える諸問題や生物学的諸現象に広く関心をもち、勉学意欲に富み、問題に対して幅広い視点から論理的に解決策を見だし得る人材を求めます。したがって、英語などの基礎科目について十分な素養を備えているとともに、とりわけ生物をはじめとする理科の科目に関して十分な学力を有していることが望まれます。このような学生を選抜するために、一般選抜を行うとともに、明確な問題意識とそれを解決しようとする極めて高い意欲のある人を特色入試で選抜します。

人類は、その長い歴史において、植物、動物、微生物など多様な生物をそれぞれの利用目的にとってより望ましいものに改良するとともに、それらの潜在能力を最大限に引き出す栽培・飼育方法を確立することや生育・生息しやすい環境を調えることに、多大な努力を重ね知恵を絞ってきました。その結果、今日では一見身の回りに食べ物や生活物資があふれているようにみえますが、地球規模で見れば食料生産が人口増加に追いつかないという深刻な事態に直面しています。また、資源生物の過度な利用が、地球環境の悪化や生態系の破壊を引き起こすという重大な問題も抱えています。資源生物の安定した高い生産性とよりよい品質の確保を、環境との調和と生態系へのマイナスインパクトの低減を図りながら追求していくことは、これからの地球と人類に求められている大きな課題です。

分野紹介

植物生産科学コース

作物学分野

フィールドを中心に、
食糧生産の諸問題に取り組む

ダイズ・イネなどの収量形成の生理・生態的機構と増収技術	教 授	白岩 立彦
イネやソバなど主要作物の品質改善	准教授	田中 朋之
ダイズ・イネなどの光合成生理と生産性に関する研究	助 教	田中 佑

育種学分野

植物の持つ多様な能力を
新品種開発に生かす

ゲノム情報の利用により作物育種課題の解決にチャレンジする	教 授	那須田周平
イネ、ダイズの代謝産物と根圏微生物叢に関する研究	准教授	寺石政義
イネの成長速度を制御する遺伝子の同定および機能解析	助 教	吉川貴徳

植物生産科学コース

応用動物科学コース

海洋生物科学コース

生物先端科学コース

蔬菜花卉園芸学分野

野菜と花に新たな可能性を求めて—
広く深く研究！

蔬菜花卉の環境応答の解明と収獲物の高付加価値化	教 授	土井元章
トウガラシ類など蔬菜における有用変異系統の探索とその機能解析	准教授	田中義行
蔬菜花卉における不安定な着色発現機構および色素の生合成に関する研究	助 教	大野 翔

果樹園芸学分野

果樹生産と果実利用に関する
基礎および応用研究

果樹の花芽形成や受粉受精・果実発育生理機構の解明とその応用に関する研究	教 授	田尾龍太郎
温帯・熱帯果樹に特異な生殖生理および成長サイクルに関する研究	准教授	山根久代
果樹特有の生理現象の解明および倍数体果樹のゲノム解析	助 教	西山総一郎
果樹類の受精障壁の人為打破法の開発	特定助教	大野健太郎

雑草学分野

雑草のしたたかな生き残り戦略を
科学する

雑草・作物・管理・環境の関係の解明とそれに基づく総合的雑草管理に関する研究	教 授	黒川俊二
外来植物の侵入経路および分布拡大メカニズムの解明	准教授	下野嘉子
除草剤抵抗性雑草における抵抗性メカニズムの解明	助 教	岩上哲史

栽培システム学分野

21世紀の農業の
生きるすべを研究している

様々なイネを栽培することで、環境との調和を目指した持続的農業技術について考える	講 師	井上博茂
---	-----	------

品質設計開発学分野

食品タンパク質の構造と
品質との関係を解明する

食品タンパク質を設計するための品質と構造に関する基礎および応用研究	教 授	丸山伸之
-----------------------------------	-----	------

品質評価学分野

農作物や食品の加工性、保存性、
おいしさなどの品質を評価する

身近な農作物や食品に含まれる成分の働きや機能を明らかにする	教 授	及川 彰
味の受容機構と外因性要因による味修飾メカニズムの解明	准教授	林由佳子
食品の品質評価や品質保持を可能にする技術の開発	助 教	松宮健太郎

熱帯農業生態学分野

熱帯地域の農業と環境問題に
取り組む —未来の地球のために—

熱帯作物の生理機構の解明と熱帯農業における生態環境の評価	教 授	樋口浩和
熱帯作物の環境ストレス耐性の評価および向上に関する研究	准教授	近藤友大

土壌学分野

「土」を知ること、それは地球の未来

自然および農耕地生態系における物質動態の解明と利用	教 授	舟川晋也
環境中の物質動態を土壌鉱物の側面から解明	准教授	渡邊哲弘
陸域生態系における主要元素の生物地球化学的プロセスの解明	助 教	柴田 誠

植物生産管理学分野

豊かな未来を創る
植物生産技術と有用植物の開発

作物の効率的な品種改良に必要な有用遺伝子の探索と機能解析	教 授	中崎鉄也
青果物の成熟および老化機構の解明と鮮度保持技術の開発	准教授	中野龍平
古代コムギを用いた有用遺伝子の探索と育種利用	助 教	西村和紗
サヤダイコンがもつ強力な接ぎ木花成誘導メカニズムの解明と採種技術への応用	助 教	元木 航
トウガラシの高温着果機構の解明と地球温暖化に適応した栽培への利用	助 教	山崎 彬

応用動物科学コース

動物遺伝育種学分野

動物の面白い生命現象を解明し
育種改良と保全につなげる

動物の質的・量的形質を規定するメカニズムの解明と育種改良への応用	教 授	横井伯英
希少動物の遺伝的多様性を解析し、その評価法を開発する	准教授	谷口幸雄

生殖生物学分野

細胞分化・発生と
動物バイオテクノロジー

哺乳動物初期胚の発生と分化を制御するメカニズムの解明	教 授	南直治郎
環境を制御して健康な受精卵をつくる	准教授	池田俊太郎
家畜の繁殖技術の改善による生産性向上	助 教	星野洋一郎

動物栄養科学分野

栄養素による動物機能調節

ビタミンとミネラルの代謝と新規機能の解明	教 授	松井 徹
動物細胞の機能が調節される仕組みを探る	准教授	舟場正幸
栄養状態とストレス反応制御機構の関係に迫る	助 教	友永省三

生体機構学分野

環境変化と動物の健康を考える

各種動物の病態生理学的解明と高機能性成分の開発	教 授	太田 毅
哺乳動物の種の生存を助ける研究	助 教	杉本実紀

畜産資源学分野

日本と世界の
家畜生産システムを探究する

家畜における食料生産、生命科学、環境負荷に関する学際研究	教 授	廣岡博之
未利用資源の飼料化・熱帯地域における畜産技術開発	准教授	熊谷 元
家畜生産システムに対する多面的な評価手法の開発	助 教	大石風人

生物資源情報学分野

最先端の情報技術で迫る
動物と人間の共存

希少動物の保全に向けた生体・行動情報の取得と解析	助 教	西澤秀明
--------------------------	-----	------

分野紹介

海洋生物科学コース

海洋生物環境学分野

豊かな海を目指して「環境、物理、生物、化学を融合した学際的研究」

高度情報通信技術(バイオロギング・バイオテレメリー)を応用した水圏生物の行動解明	教 授	三田村啓理
生物の音や発信機を使った行動観察手法の確立とその適用	准教授	市川光太郎
水圏生態系における生物の生態解明と資源保全	特定准教授	木村里子
通し回遊魚の生活史と保全に関する研究	特定助教	久米 学
沿岸海洋の物理環境と生物圏との相互作用の解明	助 教	小林志保

海洋生物増殖学分野

来たれ、魚の研究を志す
熱意あふれる高校生

卵～稚魚期に起こる形や能力の変化とホルモンの関係の研究	准教授	田川正朋
沿岸海産魚の個体群構造や分子生態学的研究	助 教	中山耕至

海洋分子微生物学分野

先端ゲノム解析による新規海洋微生物
の探索と遺伝子資源開発

水圏ウイルスの分子生態とその有用遺伝子の機能解析	教 授	吉田天士
水圏における真核微生物の多様性と有用物質合成系の解明	准教授	神川龍馬

海洋環境微生物学分野

一緒に、微生物による「モノ」作りや共生
微生物の研究にチャレンジしませんか！

微細藻類・ラビリンチュラ類のカロテノイド・ω3系脂肪酸等有用物質関連遺伝子の解析・操作	教 授	澤山茂樹
深海から浅海まで幅広い海洋環境に見られる微生物共生系の研究	准教授	中川 聡
有用物質生産に向けたメタデータ解析に基づく微細藻類の分子育種基盤の構築	特定助教	森本大地

海洋生物生産利用学分野

機能解析、利用法開発など
海洋生物資源の新たな可能性を探る

機能性脂質成分の探索と作用機構の解明	教 授	菅原達也
海洋由来色素成分の有効利用に関する研究	助 教	真鍋祐樹
網羅的分析手法を活用した機能性成分の探索	特定助教	毛利晋輔

海洋生物機能学分野

海洋生物がもつスーパーパワーの探究
遺伝子改変技術で生物の不思議を科学

海洋生物成分のヒトの健康増進作用の解明	教 授	佐藤健司
海洋生物の遺伝子機能の解析と育種への利用	准教授	木下政人



セルソーターによる海洋微生物の解析



表の黒い鱗が裏側にも発現したヒラメ稚魚



プラチPS細胞



アジアカムギで焼いたパンの比較試験

生物先端科学コース

植物遺伝学分野

植物のゲノムの構造、機能、
多様性を探求する

植物の種内分化と適応機構、倍染色体成立についての遺伝学的研究	教 授	吉田健太郎
--------------------------------	-----	-------

植物生理学分野

植物の環境適応を
分子のことで明らかにする

花成を調節する機構(特にフロリゲンの作用機構)と有性生殖の制御機構の研究	教 授	荒木 崇
植物の卵・精子・配偶体の発生メカニズムとその応用に関する研究	准教授	山岡尚平
光環境に応じて適切に成長相を転換する仕組みの研究	助 教	井上佳祐

栽培植物起原学分野

ゲノム解析により
栽培植物の進化にせまる

生物のゲノム進化	教 授	寺内良平
ソバをモデルとした植物生殖機構の分子進化学的研究	助 教	安井康夫
統計的手法を応用した栽培植物の育種・進化学的研究	助 教	堺 俊之

植物病理学分野

植物と病原微生物の
戦いの分子生物学

植物と病原菌の相互作用の背景にある分子メカニズムの解明	教 授	高野義孝
植物とウイルス間における宿主特異性の分子機構の解明	准教授	三瀬和之
多様な環境における植物と細菌の相互作用の背景にある分子機構の解明	准教授	峯 彰

昆虫生態学分野

昆虫の生態・行動・進化の謎を
解き明かす

昆虫の社会の仕組みとその進化の謎を解く	教 授	松浦健二
昆虫の社会コミュニケーションのメカニズムとその進化プロセスの解明	助 教	高田 守

昆虫生理学分野

昆虫の多彩な形質の
生理基盤を解明する

昆虫の脱皮変態の分子生理学的基盤の解明・新規遺伝学的ツールの開発	教 授	大門高明
多様な形を生み出す昆虫の発生プロセス進化学	助 教	大出高弘

微生物環境制御学分野

微生物の生活を
寄生・共生・進化の視点から研究する

カビ・きのこの生き様を遺伝子・分子を通して研究する	教 授	田中千尋
森林をめぐる生物間相互作用を微生物の視点で解き明かす	助 教	竹内祐子

生態情報開発学分野

害虫と天敵の相互作用と
環境への適応を探索

農業害虫を防除するための天敵の生態的・遺伝的特性解明	教 授	日本典秀
植物ダニの紫外線耐性・薬剤抵抗性メカニズムの解明	准教授	刑部正博
植物、害虫、天敵の相互作用に関する実験生態学	助 教	矢野修一



オオタバコガ幼虫



大害虫のハダニ類

主な研究紹介

地球の未来を
熱帯農業から考える熱帯農業生態学分野
樋口 浩和 教授

熱帯農業生態学分野では、多様な熱帯作物や熱帯農業を対象に、理系から文系にまたがる総合的な手法による研究が行われています。研究アプローチの自由度が極めて高いユニークな分野です。とくに、熱帯作物の栽培研究と熱帯地域での調査研究に大きな特徴があります。熱帯作物や資源植物の栽培特性や環境ストレス耐性の解明や、熱帯農業生態系の持続性や環境保全機能の評価に関する研究が、圃場での栽培実験や測定、実験室での分析、熱帯アジアやアフリカを中心とした現地調査によって行われ、熱帯農業の発展や地球環境の保全に貢献する多くの成果を生み出しています。所属する学生のみならずには、熱帯現地の大学や生産者との交流を通して、地球規模での農業生産や環境問題を洞察する幅広い視野を養ってもらいたいと考えています。

熱帯作物の環境ストレス応答を測定
(湛水下の熱帯性トウモロコシの光合成測定)熱帯果樹・主食用作物・香辛料作物が
栽植される熱帯のホームガーデン
(タンザニア・ウルグレ山)農業生態系における
生物の生き様を理解し、
害虫防除に活かす生態情報開発学分野
日本 典秀 教授

化学農薬を使わずに農作物を栽培すると、様々な病害虫・雑草が発生するため、収量が半減すると言われています。農業生態系では、農薬使用や栽培管理による多様性の減少のためバランスが崩れるためです。一方、自然生態系では、多様な生物間の相互作用によりバランスが保たれているため、特定の植食者の大発生は、あまりありません。また、一部の害虫たちは、新たに開発される化学農薬に対しても抵抗性を発達させ、防除困難になっています。したがって、安定した農業生産のために、様々な防除手段を適切に組み合わせた総合的病害管理(IPM)の構築が求められています。IPM構築のためには、農地や自然界における植物-植食者-天敵の生物間相互作用を理解し、活用することが必要です。当分野では、害虫や天敵の生態を解明し、適応と進化のプロセスを知るとともに、その知見を利用して害虫防除につなげる研究を行っています。



(左上) 害虫アザミウマを捕食する天敵ヒメハナカメムシの幼虫、(右上) 薬剤抵抗性が発達している大害虫ナミハダニ、(左下) 天敵温存植物に訪花するアブラムシの捕食性天敵ヒラタアブ、(右下) トマト害虫の新たなオールマイティ天敵タバコカスミカメ

卒業生の進路 (大学院進学後の進路を含みます)

農林水産省、経済産業省、地方公共団体、花王、住友化学、アクセンチュア、日本新薬、パナソニック、三井物産、日清食品ホールディングス、味の素、タキイ種苗、タカラバイオ、雪印メグミルク、サッポロビール、アサヒ飲料 など

応用生命科学科

生命現象を分子レベルで解明し、 バイオテクノロジーに発展させる

アドミッションポリシー

生命科学、食料生産、環境保全に強い関心を持ち、生命現象や生物の機能を化学的な視点によって解明・活用することに興味がある人を求めます。また、自分の考えをもつとともに異なる意見にも耳を傾けることができ、自分の考えをまわりのひとに的確に伝えることができる人が望まれます。その選抜にあたっては、筆記試験による一般選抜の他に、未知の領域に好奇心をもって挑戦できる人材を選考する目的で特色入試を行います。

応用生命科学は、微生物、植物、動物などの生命がどのような仕組みで生まれ維持されているのかを、化学の視点から分子レベルで解明することをめざす学問です。生物がもっている力をバイオテクノロジーとして利用し、食料の生産、暮らしや産業に役立つ物質の生産、健康で快適な生活の実現に役立てることをめざしており、これまで農作物生産、医薬・食品・化学工業、環境保全など幅広い分野の技術の進歩に大きく貢献してきました。

応用生命科学科の教育は、生体分子の性質や反応、分子と分子の間の相互作用を扱う諸学問、すなわち、有機化学、物理化学、生化学、分子生物学などの科目が基盤となります。加えて応用微生物学、植物生理学といった生物が持つ多様な機能を学ぶ科目、さらには食品工学、生物工学など応用面に生かされている技術の原理を学ぶ科目もあります。カリキュラムの多くの時間が、関連する学問領域の基礎的な実験技術を得得するための実習科目に割り当てられており、これは本学科の大きな特徴です。

このような教育を通じて、生命現象の深い理解にもとづいた独創的な技術の開発をめざす、優秀な研究者や技術者が育ってくれるものと期待しています。

現代の人類は、環境劣化を防ぎながら食料やエネルギーを確保し、生活の質を向上させるという難しい課題に直面しています。

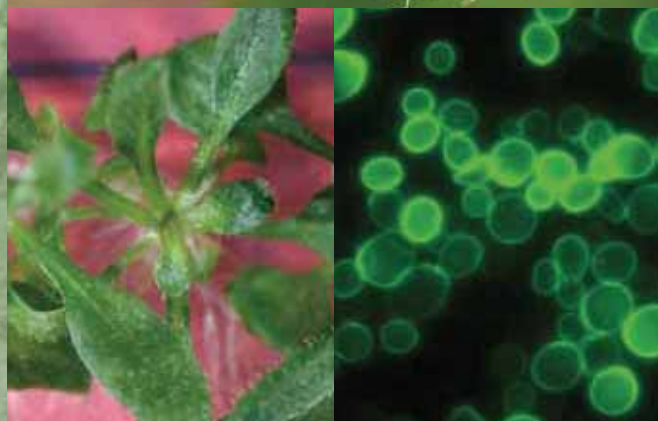
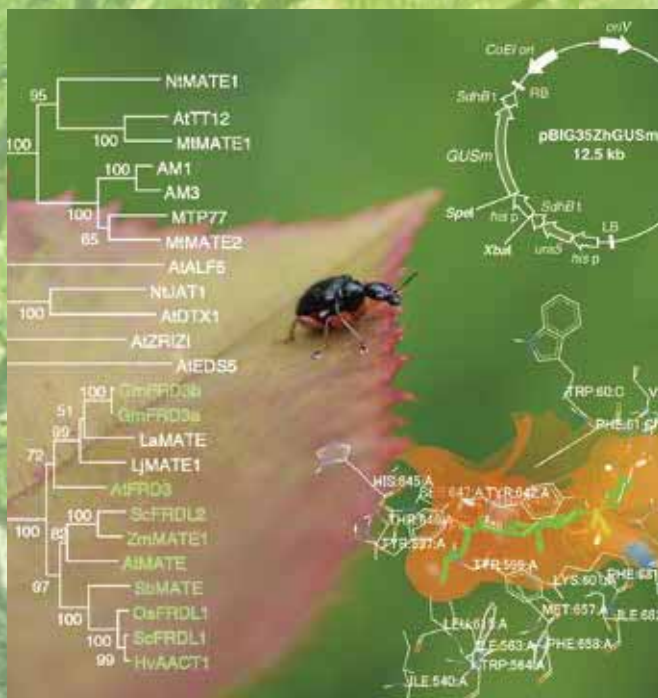
ぜひ「バイオ」の力でその解決にチャレンジしてみてください！

分野紹介

細胞生化学分野

人の健康を分子レベルで科学する

動物細胞を取り巻く環境が細胞の生存やがん化を制御する仕組みを解く	教 授	木岡紀幸
生体分子の輸送を原子レベルで理解する	准教授	木村泰久
脂質輸送に関わるABCタンパク質の生理機能に迫る	特任助教	永田 紅



生体高分子化学分野

ゲノムからトレジャー・ハンティング

有用微生物の創出・生命現象の理解・新規バイオツールの開発	准教授	黒田浩一
新規オミックス技術による生命システム動作原理の解明	助教	青木 航

生物調節化学分野

小さな分子で調節される生物の機能

作物を守るよいくすりを作りたい	教授	宮川 恒
生物の毒に含まれるペプチドの構造と機能を明らかにする	准教授	宮下正弘

化学生態学分野

生態系を化学の言葉で解き明かす

化学の目で見た昆虫と植物、昆虫と動物の攻防	教授	森 直樹
昆虫の環境への高い適応能力を発育の制御の面から明らかにする	助教	小野 肇
生理・生化学から暴食害虫の強さに迫る	助教	吉永直子

植物栄養学分野

植物研究で地球の物質-エネルギー循環を考える

光合成のしくみを分子レベルで理解し利用する	教授	伊福健太郎
植物におけるホウ素とカルシウムの役割を理解し作物の栄養診断に役立てる	准教授	小林 優
NPK施肥量の低減を可能にするイネを作る	助教	落合久美子

エネルギー変換細胞学分野

微生物から学ぶ生命現象のしくみ

生物の代謝ストレス応答機構の解明とその利用	教授	井上善晴
細胞の環境応答を栄養・代謝シグナル伝達の視点から理解する	特任助教	野村 亘

発酵生理及び醸造学分野

微生物に無限の可能性を求めて

微生物の多彩な機能で未来社会を拓く	教授	小川 順
有用微生物の探索を基盤とした微生物活用法の開発	准教授	岸野重信
微生物機能開発、微生物相互作用の応用展開	助教	安藤晃規

制御発酵学分野

小さな微生物の大きな力
- その探求と機能開発 -

分子細胞生物学・生化学と応用機能開発	教授	阪井康能
代謝生理・遺伝子発現制御機構の解明と応用機能開発	准教授	由里本博也
分子細胞生物学と食糧・環境問題解決を目指した応用微生物学	助教	白石晃将

生体機能化学分野

生物に関わる電子やイオンの動きを理解し応用する

細胞膜でのイオンや電子の動きの理解と応用およびイオンセンサーによる作物栽培環境の管理	教授	白井 理
生物電気化学現象の解明とセンサーへの応用	助教	北隅優希
生物電気化学が拓くバイオテクノロジー(電池・センサー・リアクター)	助教	宋和慶盛

生物機能制御化学分野

化学のメスで生命現象を紐解く

ミトコンドリアの機能を制御する生理活性化合物の分子設計と合成	教授	三芳秀人
ミトコンドリア膜輸送体を標的とする阻害剤の合成と作用機構の解明	准教授	村井正俊
機能性分子の創製に基づく電子伝達酵素(NADH脱水素酵素)の機能解明	特任助教	樹谷貴洋

応用構造生物学分野

タンパク質分子の立体構造を調べて新機能分子を設計する

分泌タンパク質・膜タンパク質の酵母による発現系構築と結晶構造解析	助教	水谷公彦
----------------------------------	----	------

植物分子生物学分野

分子遺伝学的に植物の環境適応戦略を探る

植物の光環境応答と発生制御の分子機構を解明する	教授	河内孝之
陸上植物の繁殖戦略の分子機構	助教	安居佑季子
植物の生殖過程における遺伝子ネットワークの解明	助教	吉竹良洋

分子細胞育種学分野

植物成長の仕組みを細胞制御と光合成の視点から探り、活かす

植物成長のしくみをケミカルバイオロジー研究の手法で明らかにする	教授	中野雄司
---------------------------------	----	------

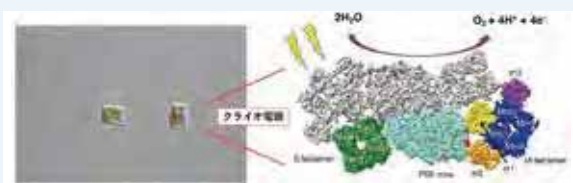
主な研究紹介



光合成
～地球を支える植物の力～

植物栄養学分野
伊福 健太郎 教授

植物は光合成によって環境中の無機物を有機物に変換し、全ての生命活動に必要なエネルギーと素材を供給するとともに、地球上の物質循環を回しています。私達の研究室では、光合成の光エネルギー変換などの植物栄養代謝を支える反応の分子機構を、無機化学・生化学・構造生物学・分子生物学的に解析し、環境ストレス応答などの植物生理現象の理解や、作物の生長促進、植物代謝機能を利用した有用物質生産に発展させることを目指しています。さらに従来の土壌・肥料学の枠にとらわれず、地球の物質循環に大きく貢献する水圏の光合成生物にも研究対象を広げ、陸上とは異なる独特の光合成システムの理解を通して、環境・エネルギー・食料問題の解決に役立てるべく、研究に励んでいます。



ツノケイソウ(*Chaetoceros gracilis*)の顕微鏡写真(左)と、その光化学系II - 集光性色素タンパク質複合体の構造(右)

卒業生の進路 (大学院進学後の進路を含みます)

林野庁、味の素、日本たばこ産業、キリン、積水化学工業、石原産業、地方公共団体、関西電力、サントリー、旭化成、不二製油、塩野義製薬、アステラス製薬、ピオフェルミン製薬、ニプロ、資生堂、コーセー化粧品、野村證券、住友商事 など

地域環境工学科

農業・農村地域の 持続的発展を科学する

アドミッションポリシー

一般選抜では、農業・農村問題や環境問題、人類への食料供給問題に強い関心を持ち、これらの問題解決に向けた物理学・数学を基礎とした工学的・技術的な方法論を学ぶために必要な学力を有する学生を求めます。ただし、農業生産と密接な関係があることから、生物学や生命科学などにも強い関心をもつ学生が望まれます。特色入試では、食料・環境・農業などの分野において、高度な専門知識と工学的問題解決能力をもって社会のリーダーとなるべき人材を求めます。特色入試において、具体的には大学入学共通テストによる基礎学力とともに、小論文試験により問題解決能力、論理的思考力について、面接試験により意欲、適性および識見について評価します。

人類が生存するためにもっとも基本的なことは食料の安定的な確保です。この意味で、農業は、人間の営みの中で最も崇高にして、最も根源的なものであるといえます。そして、このような生産活動が行われ、農村生活が営まれている空間が「地域」です。

自然環境との調和に配慮しながら農業・農村が持続的に発展するために、地域における重要な環境基盤である水、土、生産管理システム、農産物の収穫・加工・貯蔵システムなどの生産環境、そして農村地域における生活環境を適切に整備・保全するとともに、バイオマス・エネルギー開発など農村固有の地域資源を積極的かつ賢明に利活用することが重要になります。

地域環境工学科では、自然科学から社会科学にわたる広汎な分野を包括する基礎科学の上に立ち、応用科学である工学や技術学を駆使して、21世紀の農業・農村地域の持続的な発展に大きく貢献することのできる人材の育成に取り組んでいます。

地域環境工学科は大きく2つの系に分かれています。「水、土、緑系」では生産・生活・自然空間が織りなす地域環境を工学的な手法によって、より豊かに、より美しく整備するための理論と技術を、また、「食料・エネルギー系」では自然環境、資源循環、省エネルギーなどに配慮した食料の生産管理・収穫・加工・貯蔵などにかかわる理論と技術をそれぞれ学ぶことができます。



インド・アッサム州の茶園の灌漑

分野紹介

施設機能工学分野

水を制御する施設の強靱化と
マネジメント

流域環境の保全を目指す農業水利施設の順解析及び逆解析	准教授	藤澤和謙
環境システム思考による農業自然資源管理	助教	木山正一
降雨による不飽和土の侵食性	特定助教	Khonesavanh Vilayvong

水資源利用工学分野

最適な水資源・水環境管理のあり方を
考える

水の流れ、それに伴う物質輸送・生物移動のモデリングと最適制御	教授	藤原正幸
最善を目指し最悪に備える水資源の開発と運用	准教授	宇波耕一
農業流域における浸透流のマクロ及びミクロスケールのモデル化	准教授	竹内潤一郎

水環境工学分野

灌漑排水による
地域の水・物質・温度環境の管理

流域および農地土壌の水・物質・熱のマネージメント	教授	中村公人
農業の環境影響評価と最適な地域水管理・営農のあり方に関する研究	准教授	濱 武英

農村計画学分野

多様な知の統合によって
地域課題の解決に取り組む

グローバル化時代に対応した新たな農村コミュニティ計画論の確立	教授	星野 敏
サイバー空間を活用した新たな農村計画手法の開発	准教授	鬼塚健一郎
Evaluation of hydro-social relations: relational values with water ecosystem services and their impact on human well-being	助教	BASU, Mritika

農業システム工学分野

農業生産における
エネルギー利用と最適化

土と機械(車両)のテラメカニクス、計算力学、農業物理モデリング	教授	中嶋 洋
農業データサイエンス、農業生産・流通の最適化に関する研究	助教	宮坂寿郎
再生可能エネルギー、資源循環型農業、マイクロバブルの利用	助教	大土井克明

フィールドロボティクス分野

農業生産におけるデバイス開発と
ネットワーク技術の研究

持続的な農業生産のためのロボットとセンシング技術の研究	教授	飯田訓久
カメラで植物状態を診断する	助教	村主勝彦
屋外環境に適した機械知能の研究	助教	増田良平

生物センシング工学分野

分子レベルから農産物・食品までの
バイオセンシング

光と音を利用した生体・農畜水産物・食品の計測	教授	近藤 直
分光法を用いた水分子ダイナミクスから見る生物センシング技術の開発	准教授	小川雄一
生体・食品・農産物計測のためのバイオセンサの開発	助教	鈴木哲仁
細胞の生命活動に関わる水分子ダイナミクスの機能評価	助教	白神慧一郎

卒業生の進路

大学院進学後の
進路を含みます農林水産省、地方公共団体、クボタ、NTT、トヨタ、日清食品ホールディングス、パナソニック、村田製作所、
大林組、ヤンマー、コマツ、富士通、住友商事、日本生命保険、明治 など

主な研究紹介

農業機械の
知能化・スマート化フィールドロボティクス分野
飯田 訓久 教授

人口縮小社会をいち早く迎えた日本では、農業の生産性を維持・向上するために、ロボット農機や情報通信技術を活用したスマート農業に取り組み、次世代農業に向けて技術革新を進めています。実用化が進みつつあるロボット農機ですが、安全面の制約で、低速作業や有人監視が必需など、省人化や効率化には課題が多くあります。これを解決するため、人工知能を応用しながら、安全第一で効率的な作業に対応できるロボット農機の研究と開発に取り組んでいます。



人工知能を適用したロボット農機のビジョンセンサ



障害物(人)の検出例

多様な地域の文脈から資源環境と
社会の両問題の解決に取り組む施設機能工学分野
木山 正一 助教

資源枯渇が危惧される小規模漁業地域での実証研究は、グローバルな通説の地域問題解決への適用限界、曖昧な通用範囲、新解釈の必要性を気づかせます。社会発展に負のサプライショックと捉えがちな高齢化や海水温上昇も、特定漁業で経済効果をもつことがあります。また世界には、近代資本の乏しい、気候変動と奮闘する漁業地域が多く、資源の公平分配が死活問題です。「漁業の成功は社会的団結力次第、科学的助言によらない」というショッキングな示唆があります。ソロモン諸島での漁業者行動分析結果は、その理解を助けるばかりか、社会的団結力の増強が何よりも漁獲量の格差は正に関係することも教えてくれます。こうした量的検証から、見通しの効く解決策を求める研究を目指しています。



西ガダルカナル地域漁業者と日本一豪州ーソロモン調査チームとの集合写真

食料・ 環境経済学科



社会・経済の制度と文化を通して 食料・環境問題の解決に挑む

アドミッションポリシー

一般選抜では、食料、環境、農林水産業等において生ずる様々な社会・経済問題に対して強い関心をもち、幅広い観点から自身の力で論理的・実証的に問題の解決に向かって努力する人材を求めます。理科系科目に興味をもちつつ、経済学を基本としながらも、経営学、社会学、歴史学など人文・社会科学を積極的に勉学したい学生を望みます。特色入試では、一般選抜によっては把握できない能力を有し、将来、高度な専門知識をもち、食料、環境、農林水産分野の発展を主導できる可能性のある人材を求めます。

今、人類が直面している難問のなかで、私たちの生活に最も関連が深いものに食料問題と環境問題があります。この問題は、先進国、途上国を問わず、また政治経済体制の違いにかかわらず、世界的にますます深刻になっています。

食料・環境経済学科では、その解決をめざすとともに、他の学科で行われる自然科学的な研究の成果が現実社会に適切に受容されるための条件を探ることや、これらを農学論として総括し、新しい食と農のパラダイム（理論体系）を発信することを目指しています。

他学科のほとんどが自然科学的な研究手法をとるなかで、この学科のみが人文・社会科学的な研究手法をもちます。人類の営み、そこには人類と自然との関わり合いが含まれますが、それを究明するには人文・社会科学的な考察は極めて重要です。

本学科では、農林水畜産業の担い手の状態とともに食をめぐる食品産業、消費者との望ましい関係を探求します。また、食と農の活動と地域や地球規模での環境問題との関係、環境保全との調和を探るとともに、都市や他産業との関係を視野に入れて、農山漁村の文化的・社会的・経済的な発展方策を世界的視野に立って解明できるように、その考察方法を学びます。



分野紹介

農業食料組織経営学分野 農業経営・フードシステム・アグリビジネスの役割と発展

農家経済経営の行動・発展と協同組合・フェアトレードの役割、それらの国際比較	教 授	辻村英之
生産から消費までのフードシステムにおける各主体の意思決定に関する研究	講 師	鬼頭弥生

経営情報会計学分野 農業生産の現場に軸足を置いた農業経営学・会計学

農業経営の意思決定支援に関する技術開発研究	教 授	松下秀介
組織的取り組みによる地域農業の効率化とその国際比較	准教授	伊庭治彦

地域環境経済学分野 環境・開発・貿易と農林業を地域次元で究明する

資源管理政策、社会・生態システムのレジリエンスに関する研究	教 授	梅津千恵子
農業政策、農産物貿易の国際比較と中国の3農問題を研究	准教授	沈 金虎

食料・環境政策学分野 食料・農業・環境問題を経済学をベースに研究する

ミクロ経済学をベースとした農業・農村政策に関する実証研究	教 授	伊藤順一
食料の生産・消費に関する経済分析及び関連政策の評価に関する研究	准教授	北野慎一

森林経済政策学分野 森林を中心とした自然環境の利用と保全を経済学の視点から考える

森林や自然環境の価値評価と環境政策に関する研究	教 授	栗山浩一
実験経済学をベースとした自然環境の保全政策や制度設計に関する研究	准教授	三谷羊平

国際農村発展論分野 途上国農村の社会経済的発展に関する諸問題を経済学・比較制度分析の視点から考える

途上国農村を支える伝統的・近代的な経済システムに関する研究	教 授	浅見淳之
タイ国における農業・農村社会の研究	助 教	中田義昭
フィールド実験と家計調査を融合させたアフリカ農村部の開発問題に関する研究	助 教	三浦 憲

比較農史学分野 「農」を軸に人間社会と自然の関わり方を歴史学的な観点から探求する

20世紀ヨーロッパ農業の形成に関する比較史的研究	教 授	足立芳宏
近現代日本の農民に対する国家政策とその反応に関する研究	准教授	伊藤淳史

農学原論分野 農学のあり方と世界の食料・農業問題を文化・社会・思想から研究する

日本・東アジアにおける農山村社会の存続及び食と農をめぐる倫理の研究	教 授	秋津元輝
熱帯地域における農民の社会・経済および人の移動と労働に関する研究	准教授	坂梨健太
地域の食と健康、若者の食事行動、食の地理的表示の研究	特定講師	Feuer, Hart Nadav

主な研究紹介



先進的農業経営の持続的発展を実現する コンサルテーションの充実を目指す

経営情報会計学分野
松下 秀介 教授

一般に、農業経営は、市況変動、異常気象、病虫害被害等、広範囲にわたるリスクに直面しています。これらのリスクに起因する農家経済の不安定さは、持続的な農業経営の発展を阻害し、結果的に我が国の食料安全保障を脅かすなど、社会全体として解決に向けて取り組まなければならない重要な問題のひとつであるといえます。特に、近年、農業経営の大規模化や企業的農業経営の各地での展開が活発化することによって、これらのリスクの内部分化が喫緊の課題として注目されています。各種のリスクを取り込んだ経営計画策定・評価手法を開発し、より実践的な農業経営意思決定支援を可能とするシステムの実用化を目指しています。



アフリカの農村から考える

農学原論分野
坂梨 健太 准教授

熱帯アフリカで暮らす人々の社会、経済、文化について、かれらと生活や労働をともにしながら調査をおこなってきました。地域社会やそこで暮らす人間を重視した現地調査を通して、わたしたちの農や食の「当たり前」を問いなおす研究をめざしています。たとえば、カメルーン共和国では、カカオ生産と狩猟活動が密接に結びついていることを明らかにしました。しかし、狩猟活動は、野生動物保護や感染症予防の観点から、ますます厳しく規制されようとしています。安易な取り締まりは現地住民の生活に影響を与えますし、わたしたちになじみの深いチョコレートの消費とも関わってきます。このように農業と対照をなす狩猟活動から、農業そのものが成り立つ要件を問いなおし、アフリカの社会からわたしたちの社会を考えなおす契機を、現場から得ています。



卒業生の進路 (大学院進学後の進路を含みます)

農林水産省、総務省、地方公共団体、日本政策金融公庫、農林中央金庫、三菱UFJ銀行、三井住友銀行、伊藤忠商事、三井物産、みずほ総合研究所、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、デロイト・トーマツ・コンサルティング、住友林業、森永乳業、日本ハム など

森林科学科

自然と環境を守り、森の恵みと、
生き物をサイエンスする

アドミッションポリシー

身近な生活空間から地球規模の環境問題までを視野に入れて、森林生態系の保全と活用、森林由来の生物資源の利用、森林と人間の共生などの課題に積極的にチャレンジする人材を求めます。一般選抜においては、応用力、適応力、科学的解析力などをバランスよく兼ね備えた人材を重視します。特色入試では、森林科学の立場から社会に貢献するための高度な専門知識と問題解決能力を習得する強い意欲と能力のある人材を望みます。

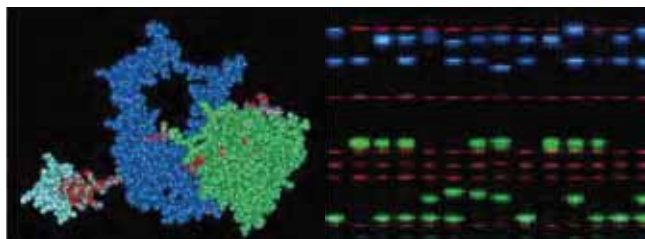
森林は、樹木や様々な動植物、菌類からなる生態系を形成しており、生活に必要な木材や紙などの木質資源を供給する一方、災害を防ぎ、安定した気候を維持するなど環境保全機能を有しています。森林科学科では、森林生態系の機能・構造と物質循環を基礎として、森林資源の持続的な生産技術、木材やバイオマス資源の利用方法、水や大気などの環境保全に果たす森林の働きの解明などを行っています。

教育カリキュラムの特徴としては、3回生から選択制のフィールド実習や学生実験を含む専門科目が本格的に始まり、4回生になると一人ひとりが希望する研究室(分野紹介欄またはwebを参照のこと)に所属して、課題研究に取り組みます。例えば、生態学、地球環境化学、緑地工学、社会制度などの様々なアプローチから、自然保護、環境共生、循環型社会の確立といった社会的な問題の解決を目指したり、材料工学、有機化学、分子生物学、バイオマスエネルギーなどのオリジナリティー豊かで先進的な技術開発・学問分野についても学ぶことができます。課題によっては、東南アジア、中国など海外にも調査に出かけます。自然科学から社会科学、基礎から応用、地球環境から細胞内の分子レベルに至る森林科学科のバラエティー豊かな研究分野からは、きっと皆さんの役に立つ、研究してみたいテーマが見つかるでしょう。

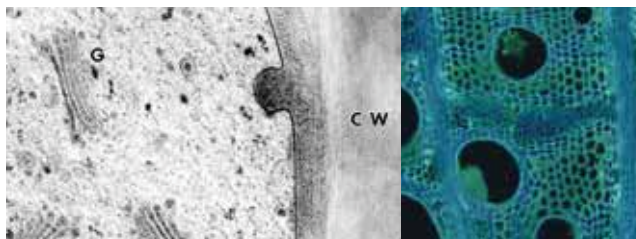
森林科学科は、「森と緑を愛する」人々の集まりです。卒業生は、大学などにおける研究者としてさらなる研究を展開しているほか、国や地方公共団体、様々な企業で活躍しています。皆さんも、我々の仲間として共に学び、一緒に研究してみませんか？



演習林でのフィールド実習や実験室で行われる様々な実験科目などから選択することができる。



分子生物学的な手法を使った解析例（左：キノコのKU70タンパク質の立体モデル、右：DNA解析を用いた樹木の系統解析）



電子顕微鏡（左）や蛍光顕微鏡（右）などを用いた細胞生物学的なアプローチ。

分野紹介

森林・人間関係学分野

森林の諸機能を最大化する
保全・管理の実現を目指す

生物多様性保全と持続的な森林管理ならびに熱帯林と地域社会の相互関係	教 授	神崎 護
森林計画制度および森林・林業統計に関する研究	准教授	松下幸司
持続的森林管理、森林劣化・減少、気候変動による地域住民への影響に関する研究	助 教	内藤大輔

熱帯林環境学分野

熱帯林を中心に地球上の
様々な森林を機能的に理解する

熱帯林植物の形質多様性と生態持続性の関係	教 授	北島 薫
森林の多様性・構造・機能に関する研究	准教授	小野田雄介
森林樹木と微生物の相互関係などに関する研究	特定准教授	門脇浩明
熱帯乾燥林の樹種多様性、熱帯林の炭素吸収・貯留機能の評価と施業に伴う変動	助 教	金子隆之

森林利用学分野

樹木成長と生理のルールを
利用に活かす

樹木による資源（光、水、養分）の利用と形態、機能に関する研究	准教授	岡田直紀
森林生態系、特に樹木根系をめぐる炭素循環の研究	助 教	檀浦正子

森林生物学分野

森林生物の生態解明に基づく
保全・管理策の構築

繁殖プロセス、系統、遺伝特性等の情報に基づく森林の生物多様性保全	教 授	井鷲裕司
野生動物による被害発生機構の解明と共存のための総合的システムの構築	准教授	高柳 敦
樹木に被害をもたらす森林昆虫の生態解析と防除への応用	助 教	山崎理正

環境デザイン学分野

自然と文化の織りなす
豊かな景観の保全と創造

自然環境や都市域における繋がり重視した環境のデザインと再生	教 授	柴田昌三
地域固有の景観の保全および活用を目指した環境デザイン	准教授	深町加津枝
地域資源の利活用を基礎とした持続可能な環境のデザインとマネジメント	助 教	貫名 涼

山地保全学分野

森林の水源涵養・土砂災害防止機能の
解明に取り組む

森林の土や岩が雨水を蓄える仕組みの解明、豪雨による山崩れの予測	教 授	小杉賢一郎
汎用土石流シュミュレータの開発、砂防構造物の配置・形状・運用手法の検討	助 教	中谷加奈
山地流域の降雨流出機構の解明、土の保水性を測る技術の開発	特定助教	正岡直也

生物材料設計学分野

木材の魅力と体力のサイエンス

木材の外観的特徴の数量表現とその感性刺激性能の定量的評価	教 授	仲村匡司
木材の変形挙動や破壊過程の解析および里山広葉樹材・早生樹材の活用	准教授	村田功二

林産加工学分野

木材を無駄なく、適切に、長く使おう

建築・家具と木材加工、木造建築の非破壊診断と維持管理、木工芸と文化財	教 授	藤井義久
シロアリなどの木材穿孔昆虫の生態解析と食害の非破壊検出	准教授	築瀬佳之
パターン認識による木材の材質や加工プロセスの自動認識	助 教	澤田 豊

生物繊維学分野

バイオマスの構造を理解し、
機能化に活かす

セルロースを中心とする多糖の固体構造・物性と機能化に関する研究	教 授	和田昌久
バイオマス材料の構造・機能制御および固体NMRに関する研究	助 教	久住亮介
バイオマス材料の形態評価および水の吸着による物性変化の解析	助 教	小林加代子

樹木細胞学分野

樹木の不思議を科学する

樹木細胞の緻密な作りには学び機能や役割を考える	教 授	杉山淳司
樹木の細胞壁におけるリグニンの分布と形成過程	准教授	吉永 新
ヘミセルロースの生合成および輸送と細胞壁形成	助 教	栗野達也

複合材料化学分野

バイオマスから次世代機能材料を！

バイオマス各種成分の分離と異種分子との分子レベルでの複合化に関する研究	教 授	上高原浩
植物バイオマスを高効率的に活用したナノ複合材料の調製と機能発現	准教授	吉岡まり子
異種素材との複合化と配向制御による天然多糖類の高機能化	助 教	杉村和紀



森林と大気や水の循環、地球温暖化対策など生物地球化学的な見地も含めて、環境や生態系の保護を目指した研究が行われている。



分野紹介

生物材料化学分野

木材の化学成分の役割を理解し、利用する

木材成分の化学分析、化学反応、および高機能化に関する研究	教 授	高野俊幸
バイオベースマテリアルの機能創出と評価法の開発	准教授	寺本好邦

森林生態学分野

森林生態系における環境と生物の関係を明らかにする

森林生態系を生物地球化学と生物多様性科学から解き明かす	教 授	北山兼弘
生物種間の相互関係を通じ、森林の構造や機能を明らかにする研究	准教授	大澤直哉

森林水文学分野

水環境や気候を守る
森林の働きを明らかにする

水や炭素などの循環によっておこる森と環境との相互作用を調べる研究	教 授	小杉緑子
Ecophysiology of forest production and carbon budget of forest ecosystems	特定教授	Daniel EPRON
森林における温室効果ガス交換量の環境応答性に関する研究	特定助教	坂部綾香

森林生化学分野

きのこや高等植物の不思議を
生化学・分子生物学で解く

きのこの分子生物学・ゲノム工学とバイオテクノロジー	教 授	本田与一
タケ・ササ類を中心とした単子葉植物の資源植物への転換	准教授	坂本正弘
キノコの分子遺伝学、生化学	助 教	中沢威人
木材腐朽菌の細胞構造と木材認識、接着、分解機構の解明	特定助教	河内護之

エネルギーエコシステム学分野

森林科学の視点からの
エネルギー問題への挑戦

木材熱分解の分子機構解明とその制御によるバイオリファイナリー	教 授	河本晴雄
超臨界流体及び低温プラズマによるバイオマスの化学変換	助 教	南 英治

生物圏情報学分野

生物資源や環境に関わる
フィールド情報学を目指して

森林生態系の水と物質の循環のしくみを調べて、環境変動に対する反応を予測する	教 授	大手信人
植物が森林生態系を維持していくために果たしている役割について	准教授	小山里奈
生態系の動態をシミュレートするモデルの開発、オオコウモリの生態と保全	助 教	Christian E. VINCENOT



先端的な解析機器を用いて、現代生物学・化学のフロンティアに触れることができる。



送粉昆虫による花粉の伝播、遺伝的多様性の解析実験のためのサンプリング。



熱帯林など、海外の様々な森林においても調査が行われている。

ヤマザクラの幹に取り付けられた樹液流速計測センサー。



希少な輸入広葉樹材の代替として北海道産シラカバ材(写真左)の音響特性を調べ、ギター(写真右)を製作。



修学院離宮の下御茶屋から上御茶屋へと向かう松並木道。実習では市内の庭園等を見学する。

マレーシア低地林での樹木の実生更新の野外調査。

主な研究紹介

森林の生物多様性を
理解し保全する

森林生物学分野
井鷲 裕司 教授

生物多様性は、生態系機能、生物資源、文化的意義など多面的な価値を持ち、私たちの生活を物質的にも精神的にも豊かにするものですが、人為の影響を受けて様々な生態系で劣化しつつあります。森林は陸上の生態系の中で最大のバイオマスを保持し、その複雑な構造は多様な生物の生息・生育場所となっています。私達は、様々な場所の森林を訪れ、フィールドワークによって生物多様性の実態を明らかにするとともに、分子生態学、保全ゲノミクスの手法を駆使して、ゲノム情報から森林生態系の生物多様性を理解し、保全、活用する研究を行っています。また、ニホンジカ、ツキノワグマなどの哺乳類やカシノナガキクイムシなど森林にインパクトを与えている生物の適切な管理、防除も研究テーマの一つです。



世界各地の調査地。左から、沖縄本島、ニューカレドニア（2枚）、ハワイ諸島。



解析対象生物の一例。左から時計回りに、奄美大島に少数個体が野生生育するサガリラン、林床植生にダメージを与えるニホンジカ、複数種に分化しつつあるハワイトモモと *Oxera baladica*、野生に1個体のみが生育するムニンツツジ、小笠原諸島固有変種アカシラカスバト、ナラ枯れをもたらすカシノナガキクイムシ。

地球環境保全に貢献する
循環型材料の化学

複合材料化学分野
上高原 浩 教授

我々の研究分野は、農学の立場から脱炭素社会および循環型経済の構築に貢献する循環型材料に関する学問を追求しています。太陽光エネルギーと水と二酸化炭素から植物体中で有機化合物が合成されます。我々は、地球の生態系の仕組みを理解しながら、生物によって合成される有機化合物、例えば植物をはじめとする生物由来材料から環境中で分解され得る安全な循環型材料を生み出す研究を、有機化学・高分子化学・材料化学などの視点から行なっています。また、東南アジアにおける植物資源探査などのフィールド研究、アジア、アメリカ、ヨーロッパの共同研究者との国際共同研究も実施しており、実験室における研究だけでは決して得られない広い視野や国際感覚を持った人材の輩出を標榜しています。



有機化学実験（木材の反応）



天然ゴム採取の様子
（タイ、トラン、2016年11月23日撮影）

卒業生の進路（大学院進学後の進路を含みます）

旭化成、王子ホールディングス、クラレ、住友林業、大建工業、竹中工務店、DIC、東レ、日本製紙、三井ホーム、三菱重工業、LIXIL、国土交通省、林野庁、森林総合研究所、地方公共団体 など

食品生物科学科



最先端の生命科学研究を通じて 「食と健康」に貢献する

アドミッションポリシー

食の観点から、「生命・食料・環境」に関わる課題を包括的に取り組み、科学的に解決する人材を求めています。具体的には、食に関わる幅広い問題に関心をもつとともに、生化学、有機化学、物理化学および分子生物学を基盤とする生命科学はもとより、人と社会に関わる哲学、経済学など人文・社会科学の基礎科目を学ぶ意欲をもち、これらの学問的背景のもとに、本学科の学理を修得し、将来、産・官・学の各分野において、食品生産工学、食品生命科学および食品健康科学に関わる創造的な研究ならびに開発・生産活動を、強い責任感および高い倫理性とリーダーシップをもって実行できる人材を求めています。その選抜にあたっては、筆記試験のみによる一般選抜の他に、国際的に活躍できる人材を選考する目的で、口頭試問を含む特色入試を行います。

今日、食に関する学問は、人類の持続的発展を維持するための最重要基盤の一つとして認識されています。本学科は、食と健康に関する生理化学・生命科学に特化したユニークな学科として、教育・研究活動を推進しています。具体的には、味覚と食感、食嗜好性の制御、栄養素の消化・吸収、酵素による分解と代謝、機能性食品成分を含む天然有機化合物の構造決定・合成と生理機能、腸内細菌を含む常在微生物の動態などに関わる人間を含む生体応答メカニズムに関する研究を、化学・生物・物理を基軸とする実験科学に基づいて分子・細胞・個体レベルで行っています。さらに、これらの成果を健康増進と疾病予防に貢献するような、食および医薬品への応用に繋がります。本学科では、世界トップレベルの研究者の育成を目指して、スタッフ全員が使命感をもって研究と教育に邁進しており、食を取り巻く広範な学問・知識を基礎から応用にわたって幅広く緻密に教授しています。卒業生の人脈は、大学などのアカデミアならびに食に関わる産業をはじめ社会の各方面と幅広い繋がりを築いています。

本学科は、食品生命科学講座・食品健康科学講座・食品生産工学講座の3つの大講座から構成され、次のような視点から教育・研究を行っています。

- (1) 生化学、有機化学、物理化学、分子生物学などの基礎科学を理解する。
- (2) 生物・人間の食行動と生理反応を分子・細胞・個体レベルで研究する。
- (3) 健康増進と疾病予防に繋がる食習慣や機能性食品、医薬品を提示する。

分野紹介

酵素化学分野

酵素の機能を、
理解し、創造し、応用する

有用酵素の創製と酵素反応の制御による食品工業と医薬工業への酵素の利用拡大	教 授	保川 清
タンパク質の翻訳や修飾に関わる酵素とビタミンDを水酸化する酵素の反応機構の解明	助 教	滝田 禎亮

生命有機化学分野

生命現象を
有機化学的手法によって解明する

がん、アルツハイマー病に関わるタンパク質の構造機能解析に基づく薬剤開発	教 授	入江一浩
機器分析・有機合成による食関連天然物の作用機構解明、 中枢神経疾患に関する核酸医薬開発	准教授	村上一馬
食用植物等に含まれる天然物の化学合成法の開発と、 その手法を基盤とする機能解明	准教授	塚野千尋

栄養化学分野

食行動をコントロールするしくみを
解明する

何を食べたいと思うか(食嗜好)を制御するメカニズムの解明	教 授	佐々木努
嗅上皮における食品香気成分の受容機構を分子レベルで解析	助 教	都 築 巧
代謝シグナルによる食行動制御機構の解明	助 教	松居 翔
熱産生脂肪細胞による代謝調節機構の解明	助 教	小栗靖生

食品生理機能学分野

身体の代謝・生理に対する
未知の食品機能を解明する

運動による疲労や代謝変化について、脳や神経の働きを探る	教 授	井上和生
食情報に基づいた新しい情動・学習・食欲調節ヘブドの探索と機能性食品・医薬品開発	准教授	大日向耕作
肥満に伴う代謝異常に関与する内因性・外因性代謝調節因子に関する研究	准教授	後藤 剛
食品成分の網羅的解析及び機能解析	助 教	高橋春弥
運動が神経増殖や骨格筋エネルギー代謝に及ぼす影響の分子機構を解明する	助 教	横川拓海
食品由来機能性成分による脳機能修飾を介した食欲・意欲の制御と分子基盤解明	特定助教	金子賢太郎

農産製造学分野

機能的な食品をデザインする

食品ソフトマターのナノテクノロジーと消化管の粘膜機能制御	教 授	谷 史 人
食品加工残渣の有効利用法開発とその高付加価値化	助 教	小林 敬
内部構造の3次元可視化情報に基づいた機能的食品の創製	助 教	小川剛伸

生物機能変換学分野

微生物の機能解析と
有用微生物の創出

微生物の巧みな生存システムの解明とその食料・環境・医療分野への応用	教 授	橋 本 渉
発酵食品における微生物のふるまいと相互作用	准教授	渡辺大輔
微生物の細胞膜変形機構の解明と膜小胞を利用した有用物質生産	助 教	高瀬隆一

生体情報応答学分野

体を健康に維持するための食品成分
や微量金属の研究は面白いぞ！

健康に良い天然物探索とその作用メカニズム解明	教 授	永尾雅哉
亜鉛など必須金属栄養素の吸収・代謝・生理機能に関する研究	准教授	神戸大朋
天然物に含まれる生理活性物質の単離・同定と食への応用	助 教	西野勝俊

主な研究紹介

発酵食品は
どのように生まれたのか生物機能変換学分野
渡辺 大輔 准教授

伝統的な発酵食品の多くは、穀類、野菜、生乳などの原材料に、酵母や乳酸菌などの微生物が作用することで作り出されます。微生物の存在が明らかになるよりもはるか昔から、代々受け継がれてきた独自の製法で原材料を加工することによって、人類は知らないうちに特定の微生物を培養してきたのです。では、こうした原材料と微生物の最適な組合せはどのように決まるのでしょうか。調べてみると、原材料中の成分とそこに棲み着いている微生物および発酵を行う微生物が複雑に相互作用し合い、生態系を形成していることがわかります。私たちは、身近な発酵食品におけるミクロな生命の営みを、原子・分子・遺伝子・細胞レベルで解明することを目的としています。

必要な栄養素を生物は
どのようにして選択している？栄養化学分野
松居 翔 助教

ヒトを含む生物は、栄養素を摂取し、代謝することで生体の恒常性を維持しています。そのため、生体恒常性の維持には、“栄養素を摂取するための食欲”があるはずですが、これまでに、“何か食べたい”のメカニズムの解明は進んでいますが、“何を食べたい”のメカニズムについては、よくわかっていません。これまでに私たちは、糖質とたんぱく質の食欲を調節するホルモンなどの代謝性シグナルの存在を示唆するデータを得ています。現在、エネルギーに依存しない栄養素に対する食欲の調節メカニズムを、各栄養素特異的に変動する代謝性シグナルに着目して解析を進めています。それにより、生体恒常性の維持に必要な“栄養の食欲”の分子基盤を明らかにしていきます。



卒業生の進路 (大学院進学後の進路を含みます)

江崎グリコ、日清食品、キリン、地方公共団体、味の素、住友化学、小林製薬、森永乳業、アサヒ、明治、サントリー、ハウス食品、サッポロ、日清製粉、三菱化学、鹿島建設、武田薬品工業、大学教員 など

学習環境



農学部図書室



農学部図書室には、情報検索用コンピュータが設置され、専門書はもちろん各種雑誌や、英字新聞のほか、軽読書室も設けられています。



学術情報メディアセンター（農学部サテライト）



農学部には学生が自由にパソコンを利用できる演習室が2部屋あります。インターネットで調べ物をしたり、レポートを作成したりと多くの学生が利用しています。



講義室



収容人数が300人を超える大教室から、10名程度で膝を突き合わせて意見交換を行えるゼミ室まで、多様な講義形態に適応した大中小の様々な講義室があります。



学生実験室



農学部の実験室を利用するのは、おもに3年生からになります。教員だけでなく、大学院生のTA（ティーチングアシスタント）が実験をサポートし、きめ細やかな指導を行っています。





X線装置



X線の回折現象を利用して生体関連分子の結晶構造や高次構造を調べることができます。

質量分析計



分子の重さを量る装置です。超微量物質の構造を決定したり、量を測定するために用います。

NMR (核磁気共鳴装置)



分子を構成する原子核の核磁気共鳴スペクトルを測定することによって、有機化合物の詳細な化学構造を決定することができます。

電子顕微鏡



光学顕微鏡では観察不可能な細胞や生物材料の微小構造(ナノ構造)を鮮明に観察することができます。

貴重文書の保管



大正初期から昭和後期に至る、最大で300戸近い全国の農家の毎日の日記や毎年の簿記記録(マイクロデータ)が保管されています。経済発展のヒントが得られ、歴史の常識を覆す発見があります。

附属施設



附属農場

〒619-0218 京都府木津川市城山台4丁目2番地1
TEL: 0774-94-6402

附属農場は、京都府木津川市の木津農場（総面積、約24.6ha）と京都大学北部構内の京都農場（約3.5ha）からなります。そこでは、広い実験圃場や温室を利用して、イネ、コムギ、トウモロコシ、ソバ、キノア、ダイズ、トマト、イチゴ、ブドウ、カキ、バラ、シクラメンなどの栽培を行い、食料、環境およびエネルギー問題の解決に向けた教育・研究の場を提供しています。木津農場では、通年実習科目「栽培技術論と実習I（2回生配当）」を開講するとともに、清潔な調理実習施設や宿泊施設を活用して宿泊実習「グリーンエネルギーファーム論と実習（1回生配当）」および「栽培技術論と実習II（3回生配当）」を開講しています。さらに、「大学コンソーシアム京都」に授業を提供して、他大学の学生を対象とした実習教育も実施しています。また、学内・学外の研究機関や企業と連携して農業生産に関する基礎から応用・実証に至る幅広い研究活動を行っています。



附属牧場

〒622-0203 京都府船井郡京丹波町富田蒲生野144
TEL: 0771-82-0047

附属牧場は京都府船井郡京丹波町に位置し（総面積：約16.5ha、牧草地：10.5ha）、約100頭の肉用牛（和牛）を飼育しており、和牛の繁殖（子牛生産）、子牛育成、肥育（牛肉生産）および牧草生産を行っています。ここでは、2年生と4年生を対象に「応用動物科学技術論と実習（集中講義）」を開講し、32名を収容可能な宿泊施設を利用して、和牛に直接触れ家畜生産の基礎を学ぶことを主眼とした実習教育を行っています。

また、農学研究科の関連分野や他の研究機関とも連携し、高品質な和牛肉を効率的に生産できる飼養管理技術や繁殖技術の開発など、基礎的および応用的研究を行っています。



関連部局



京都大学フィールド 科学教育研究センター

フィールド科学教育研究センターは、近畿地方各地、北海道、山口県の全国10カ所に教育研究施設を有しています。農学部は、森林科学の実習を芦生研究林や北海道研究林（標茶区・白糠区）などで、海洋資源生物学の実習を舞鶴水産実験所で、植物調査実習を紀伊大島実験所で体験できます。各施設には宿泊施設があり、夏休みや冬休みに合宿形式で開講する集中講義の学生が宿泊するだけでなく、より深く研究する学生や研究者が滞在しています。また、農学部キャンパス内の北白川試験地や、ほど近い上賀茂試験地では、実習や卒業研究などが盛んに行われています。さらに、全学共通のILASセミナーに、フィールド科学教育研究センターが推進する生態系間そして人とのつながりを取り戻すことで持続可能な社会の創生を目指した森里海連環学に関連する数多くの実習を提供している。



森林ステーション

(芦生研究林、北海道研究林、和歌山研究林)

亜寒帯から暖温帯にいたる森林植生を維持管理し、長期モニタリング、合宿形式での実習などを行う場を提供している。



里域ステーション

(北白川試験地、上賀茂試験地、徳山試験地、紀伊大島実験所)

外国産樹種の導入、里山再生や亜熱帯植物の研究などを行うほか、学生実習などの教育の場を維持管理している。



海域ステーション

(舞鶴水産実験所、瀬戸臨海実験所)

河口域・沿岸域の生態系と生態学の研究（舞鶴）、海洋生物の進化・系統分類学、生態学などの自然史学的研究（瀬戸）とこれらに関連した実習や実験を行う場となっている。

国際交流



農学部における留学

京都大学では、国際社会で活躍する人材を育成するため、学生の国際感覚や資質を高めるために様々な留学の機会を設けています。以下に代表的なものをいくつか紹介します。

まず、主に1・2年次で学ぶことになる全学共通科目の中に、ILAS セミナー（海外）が開講されています。この科目は、事前講義と2週間程度の海外研修が組み合わされ、現地の自然・政治・経済・文化・歴史・生業などを学ぶものです。農学部教員が参加している科目もあり、農学部生にとって参加しやすい海外研修と言えます。

次に、1学期から最長1年間海外の大学の講義を聴講するための交換留学の制度が設けられています。この制度を利用すれば、学生は京都大学に籍を置いたまま休学することなく、学生交流協定を結んでいる世界各国の大学に留学することができます。留学中も京都大学に授業料を納めることで、派遣先大学の授業料は免除となります。また、派遣先大学で修得した単位が京都大学での修得単位と認められる単位認定制度もあります。

このほかにも学生交流協定校が募集するサマースクール、スプリングスクールなどのプログラムを含め、農学部では毎年多くの学生が留学しています。自ら積極的に海外へ目を向けてみてください。

交換留学の体験記

私は3回生の後期から、イギリスのキングス・カレッジ・ロンドンへ留学しました。ロンドンの中心部にキャンパスがあり、ロンドンの主要な観光地である大英博物館やバッキンガム宮殿に放課後訪れることもありました。人種のるつぼと言われるロンドンで、街中を歩けば英語だけでなくスペイン語、中国語を始め様々な言語が飛び交う環境の中で6カ月間生活しました。

留学先では主に経済学、言語学の授業を受講しました。現地での授業は、講義による一方的な学びだけでなく、生徒同士のディスカッションの機会が多く設けられ、生徒が学びに主体的に参加していくことが求められました。最初は英語での議論に戸惑いを隠せませんでしたが、第二言語であれ堂々と発言し、議論に参加していくクラスメートの姿勢を見て、私も少しずつ議論へ参加することが出来るようになりました。

短期間であったとはいえ、日本とは異なる環境で生活し、現地の学生と同じように勉強できたことは私にとって大変有益な経験となりました。

他にも国際交流や、短期留学の機会が学部生の間でもたくさんあります。農学部へ入学後はぜひその機会を活用し、海外へと飛び出してみてください。



毎日の食事も、留学生活の楽しみの一つでした。



キャンパスの隣には冬になるとスケートリンクができ、たくさんの人でにぎわっていました。



友人と移動遊園地に行きました。

資源生物科学科4回生 平成29年度入学 本田 華鈴





新入留学生歓迎会▶



国際交流室

農学部と農学研究科の国際交流推進を目的として、留学生ならびに外国人研究者の勉学と研究生活の支援、客員教授の招聘業務などを行っています。事業として、新入留学生ガイダンスと歓迎会をはじめとして、日帰り見学会、日本語教室などを開催し、留学生や外国人研究者どうしだけでなく彼らと日本人学生・研究者との交流を図っています。当室の活動は年2回発行のニュースレターに紹介されています。

■担当教員

室長	教授	秋津元輝
比較農業論講座	准教授	三宅武
	准教授	真常仁志
	准教授	片山礼子
農学研究科	准教授	Garry John Piller

日本語教室▲

海外の大学間・部局間学生交流協定校一覧(令和3(2021)年度)

国名	協定校名	国名	協定校名	国名	協定校名	国名	協定校名
中国	復旦大学	台湾	コンケン大学	アイスランド	ドレデン工科大学	メキシコ	ケベック大学ウタウエ校
	香港科技大学		キングモンクット工科大学トンブリ校		ケルン大学		ラファル大学
	香港大学		キングモンクット工科大学ラーカバン校		ハンブルク大学		マギル大学
	香港中文大学		シルバコーン大学		ルール大学ボフム校		コンコルディア大学
	香港理工大学		国立台湾大学		ミュンスター大学		トロント大学
	南京大学		国立清華大学		シュトゥットガルト大学		ウォータールー大学
	北京大学		国立宜蘭大学	イタリア	アイスランド大学		ブリティッシュコロンビア大学
	清華大学		国立中興大学		アイスランド国立大学ダブリン校		アルバータ大学
	武漢大学	ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校		ダブリン大学トリニティ・カレッジ・ダブリン		サイモン・フレイザー大学
	浙江大學		フエ大学		ミラノ工科大学		モンテレイ工科大学
	上海交通大学		ダナン大学		ヴェネツィア大学	ブラジル	グアタハラ大学
	西安交通大学		カントー大学		ローマ・ラ・サピエンツァ大学		サンパウロ大学
	南開大学	ミャンマー	ミャンマー林業環境科学大学		バーリ大学		チリ大学
	昆明理工大学		テルアビブ大学	オランダ	モリーゼ大学	アメリカ合衆国	アリゾナ州立大学
	南京農業大学		コッチ大学		エラスムス・ロッテルダム大学		カリフォルニア大学サンタクルーズ校
	東北林業大学	イスラエル	メルボルン大学		ライデン大学		ノートルダム大学
	上海海洋大学		ニューサウスウェールズ大学		ユトレヒト大学		ロチェスター大学
	中国農業大学		アデレード大学	ノルウェー	フローニンゲン大学		ハワイ大学マノア校
	西北農林科技大学		シドニー大学		ワーヘニンゲン大学		ワシントン大学
	江南大学	トルコ共和国	オーストラリア国立大学		マーストリヒト大学		ウィスコンシン大学マディソン
	同済大学		クイーンズランド大学		ノルウェー科学技術大学		テキサス大学オースティン校
	瀋陽農業大学		チャールズ・ダーウィン大学	ルクセンブルク	オスロ大学		テキサスA&M大学
	華南農業大学	オーストラリア	オークランド大学		ルクセンブルク大学		ジョージ・ワシントン大学
	浙江工業大学		オタゴ大学		バルセロナ大学		ノースイースタン大学
	山東大学		マッセー大学		バルセロナ自治大学		カリフォルニア大学サンディエゴ校
	華中農業大学		ウィーン大学	スペイン	マドリッド自治大学		メリーランド大学カレッジパーク校
	広西大学	ハンガリー	ウィーン農科大学		ナバール大学		イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校
	中国農業科学院		エトヴェシュ・ローランド大学		バレンシア工科大学		ワシントン州立大学
	吉林大学	ベルギー	ルーバン・カトリック大学 (Université Catholique de Louvain)		チャルマース工科大学		ケンタッキー大学
	吉林農業大学		ルーヴェン・カトリック大学 (KU Leuven)	スウェーデン	スウェーデン王立工科大学 (KTH)		
	韓国科学技術院 (KAIST)		ヘルシンキ大学		ストックホルム大学		
	高麗大学校	フィンランド	アールト大学		ウプサラ大学		
	慶北大学校		パリ大学	スイス	ローザンヌ大学		
	浦項工科大学 (POSTECH)		グルノーブル大学連合 (以下5大学)		スイス連邦工科大学ローザンヌ校 (EPFL)		
バングラデシュ	ソウル大学校	フランス	グルノーブル国立建築大学		ベルン大学		
	延世大学校		グルノーブル理工科大学	英国	チェルシー大学		
	成均館大学		グルノーブル政治学院		マンチェスター大学		
	国立韓京大学校		グルノーブル・アルプ大学		ノッティンガム大学		
	国立慶尚大学		サヴォワ大学		ダラム大学		
インドネシア	バングラデシュ農業大学	ポーランド	ストラスブール大学	カナダ	サセックス大学		
	バンドン工科大学		フランス国立東洋言語文化研究所 (INALCO)		シェフィールド大学		
	インドネシア大学		パリ国立高等鉱業学校		プリストル大学		
	ブラヴィジャヤ大学		パリ政治学院		バーミンガム大学		
	IPB大学 (旧ボゴール農業大学)	ロシア	エコール・ノルマル・シュペリウール		ニューキャッスル大学		
フィリピン	ガジャマダ大学		エコール・ポリテクニーク	英国	ロンドン大学クイーン・メアリー		
	ムラウルマン大学		ボルドー大学		ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL)		
	タンジュンブラ大学		ロレーヌ大学		ヨーク大学		
	フィリピン大学		モンペリエ農業科学高等教育国際センター		ウォリック大学		
	シンガポール国立大学	ドイツ	西プルトーニウ大学		エクセター大学		
シンガポール	南洋理工大学		ヤギェウォ大学		リーズ大学		
	マレーシア工科大学		サンクトペテルブルク大学	英国	エジンバラ大学		
	マラヤ大学		ベルリン自由大学		サウサンプトン大学		
	フトラ・マレーシア大学		フンボルト大学		キングス・カレッジ・ロンドン (KCL)		
	ブルネイ・ダルサラーム大学	インド	ミュンヘン大学		グラスゴー大学		
カンボジア	パラナシヒンドゥー大学		ハイデルベルク大学		ハーバー・アダムス大学		
	インド工科大学グワハチ校 (IITG)		ミュンヘン工科大学		ケベック大学学長協議会 (以下9大学)		
	インド工科大学カラガプール校 (IIT-KGP)		ボン大学		ビショップス大学		
	王立農業大学		ゲッティンゲン大学		ケベック大学高等工科大学		
	カンボジア工科大学		カールスルーエ工科大学		シュルブルック大学		
タイ	チュラロンコン大学	タイ	アーヘン工科大学		ケベック大学モントリオール校		
	カセサート大学		ベルリン工科大学		ケベック大学リムスキー校		
	タマサート大学		ドルトムント工科大学		ケベック大学トロワ・リヴィエール校		
	チェンマイ大学				ケベック大学アビチ・テミスカミング校		

農学部・農学研究科の国別留学生受け入れ数(令和3年度)

国名	人数
アゼルバイジャン	1
アフガニスタン	2
イラン	1
インド	2
インドネシア	30
エジプト	2
カメルーン	1
カンボジア	4
ケニア	3
タイ	7
ナイジェリア	1
バングラデシュ	6
フィリピン	1
ブラジル	1
ベトナム	4
マレーシア	6
ミャンマー	8
モロッコ	9
韓国	10
台湾	16
中国	118
香港	1
米国	5
総計	239

大学院生、研究生、特別聴講学生等を含みます。

CAMPUS MAP



① 農学部総合館



② 農学研究科2号館



③ 農学・生命科学研究棟



④ 農学部正門前の並木

吉田キャンパス 北部構内





⑤ 北部食堂



⑥ 四明会事務室(同窓会)



⑦ 附属農場(京都農場)



⑧ 北部グラウンド



⑨ 宇治地区研究所本館

緑豊かな吉田キャンパス北部構内に位置する農学部では、数多くの研究者を輩出してきた歴史に培われた環境のなかで、生命・食料・環境に対する絶え間ない研究と明日の農学への探究が行われています。

大学周辺には学生の下宿が多く、生活に役立つお店が数多く軒を並べています。観光地としても有名であり、重要な史跡や神社仏閣、土産物店など、京都ならではの風物を随所に見ることができます。

また、吉田キャンパスの東南、約15キロの宇治市五ヶ庄に宇治キャンパスがあります。農学部・大学院農学研究科の一部は、こちらで教育・研究活動を行っています。

なお、キャンパス間は無料のシャトルバスが運行しています。



食堂



Shop

生協店舗、売店

宇治キャンパス



アクセスマップ



吉田キャンパス(北部構内)への交通案内

主要鉄道駅	乗車バス停	市バス系統	市バス経路	下車バス停
京都駅 (JR・近鉄)	京都駅前	206系統 17系統	東山通 北大路バスターミナル 河原町通 銀閣寺・錦林車庫	「百万遍」 「京大農学部前」
京都河原町駅 (阪急)	四条河原町	201系統 31系統 3系統 17系統	祇園・百万遍 東山通 高野・岩倉 百万遍 北白川仕伏町 河原町通 銀閣寺・錦林車庫	「百万遍」 「京大農学部前」
今出川駅 (地下鉄丸線)	烏丸今出川	201系統 203系統	百万遍・祇園 今出川通 銀閣寺道・錦林車庫	「百万遍」 「京大農学部前」
東山駅 (地下鉄東西線)	東山三条	206系統 201系統 31系統	高野 北大路バスターミナル 百万遍・千本今出川 東山通 高野・岩倉	「百万遍」
出町柳駅 (京阪)	当駅から徒歩約15分			

宇治キャンパスへの交通案内

黄檗駅 (JR・京阪)	当駅から徒歩10分
吉田・宇治キャンパス連絡バス	約50分

京都大学農学部

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
TEL. 075-753-6012

<http://www.kais.kyoto-u.ac.jp>